

研究タイトル：

新 MCC を捉えた国語の在り方

氏名：	有働 万里子	E-mail：	m-udo@kumamoto-nct.ac.jp
職名：	助教	学位：	教職修士
所属学会・協会：	国際教育学会、キャリア教育学会		
キーワード：	コミュニケーションスキル、MCC、自発的、教科横断型		



研究内容：

効果的かつ対話的なコミュニケーション能力の育成 — 国語 1 における取り組みとその成果 —

有働 万里子 (リベラルアーツ系人文Gr)
キーワード (コミュニケーションスキル、自発的、教科横断型)

熊 6

MCC への対応を考えた教科横断型、汎用的なスキルを育成する国語教育として、グループワーク・グループディスカッションを主とした授業計画を構想・実行している。コミュニケーションスキルを基盤にスパイラルアップ的に能力の育成を図ることができるよう、難易度を徐々に上げた教材、学生主体のQFTワーク、ファシリテーター育成を段階的に施すことで、授業活性化、参加意識の向上の効果を得ることができた。今後は評価の面にて、より効果的で継続的な「振り返り」の場を設けることに拠る効果、教科横断だけでなく、キャリア教育、アントレプレナーシップマインドを育成する国語教育の可能性を見出ししていく。

はじめに

国語 1 は 1 年時通年で履修する科目であり、高専での学びの基礎となるコミュニケーション能力育成の場として重要な立ち位置を担っている。昨年度までの課題として

- ① 育成したい能力が明確化されておらず、段階的なコミュニケーション能力育成ができていない
- ② 授業内での自発的なコミュニケーションが、効果的かつ双方向的な「対話」になっていない。

① 育成したい能力を明確化し、各単元で段階的に育成を図る
② 効果的かつ対話的なコミュニケーションを行う時間を設けるを意識して授業を行った。その取り組みと現状の成果を述べる。

国語 1 で育成したい能力

「効果的かつ対話的なコミュニケーション能力」の育成
↓
具体的な項目として、本年度は実験的に※1「MCCモデル基盤的資質・能力」の項目を意識

※2 生涯にわたる社会生活に必要な国語として他者との関わり合いのなかで伝え合う力を高める

国語 1 で育成したい能力を段階的に組み込んだカリキュラム

<p>1. 知らないものに出会う相手のことを考える 趣：これからの社会に必要な国語とは何かを考える。お互いを知らない他者との協働による学びを行う。</p> <p>情報収集・活用 発信力</p> <p>思考力</p> <p>コミュニケーションスキル</p>	<p>2. 思考の枠組みを広げる 趣：文学作品をどう捉えるかをチームで考える。自分自身と他者との比較を行い、学生側からの授業・問い設計を提案する。</p> <p>思考力</p> <p>チームワークとリーダーシップ</p> <p>コミュニケーションスキル</p>	<p>3. 効果的な対話を探る言葉を見つめる 趣：課題に対してチームで取り組み、問題解決を図る。的確な表現や効果的な話し合いは何かを考える。</p> <p>チームワークとリーダーシップ</p> <p>課題発見・問題解決能力</p> <p>コミュニケーションスキル</p>	<p>4. 情報社会を生きる科学技術と人間多文化共生社会と私 趣：社会に目を向け、興味関心のある話題に対して情報収集・活用・発信する。</p> <p>課題発見・問題解決能力</p> <p>情報収集・活用 発信力</p> <p>コミュニケーションスキル</p>
---	--	---	---

※2 学年 継続してスパイラルアップ的に能力を育成

国語 1 本年度の取り組み

芥川龍之介「羅生門」QFT (問いづくり) ワークを班で行い、物語を新たな視点で捉えていく。定期テストの問題も学生自身が考える。

ワールドカフェ/グループディスカッション
クラス全体で現状の課題や話し合いたい課題を決め、目的に基づいてグループでの効果的なディスカッションの場を創り上げていく。実際のディスカッションでは、ワールドカフェの手法を取り入れたり、効果的な発表について検討したり、哲学的な問いにもチームで取り組み姿が見られた。

小論文
興味関心のある社会の話題について、情報を集め、情報を吟味したうえで、文章化し、情報発信していく。発信した情報は受信者によって再度確認・評価する活動をグループで行う。(実践中)

成果

- ◎ 授業満足度アンケート評価として「班活動がたくさんあり、自分の意見を交流する時間がたくさんあって、自分の考えを深めることができた。」という意見が得られた。
- ◎ FD公開授業における教員の相互評価として、「参加意識が高められる工夫がある」、「授業活性化の工夫がある」との評価を得られた。
- ◎ 実施者自身の主観的な成果として、主体的にコミュニケーションを取ろうとする学生が増え、講義回数が進むにつれて、自然とグループでの話し合いを始め始める学生が増えた。
- ◎ 他の授業でも、グループディスカッションで学んだ手法を活かして話し合いを進める学生の姿が見受けられた。

今後の課題

- 1 評価上の課題
「効果的かつ対話的なコミュニケーション」能力の育成として、本年度はMCCモデル基盤的資質・能力の各項目を意識したが、それぞれの項目について何ができて、何ができていないとするのか、評価を吟味する必要がある。
- 2 グループ編成上の課題
グループ活動は3人～5人の編成で行ったが、最も効果的にグループ活動の活性化が図られる人数とその組み合わせ、各クラス・学生の能力に適したグループ編成の最適解を探る必要がある。
- 3 第二学年以降の接続